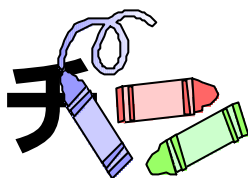


# リサーチ



## 想像力の育成を

今年度もいよいよ大詰めです。あと半月余りで、新しい教育課程が展開される平成14年度を迎えますが、準備万端怠りなく整えてスタートを切りたいものですね。

ところで、これからの学校でめざしたいのは何よりも「生きる力」の育成であることは言うまでもありません。「生きる力」と言うと、これからの不確定な世の中で、そして不安定な情勢の中でもサバイバルな戦いを勝ち抜いて「生き残る力」や「生き抜く力」を思い浮かべる人たちが多いようです。

しかし、ここでねらっているのはそうした力ではなく、「(よりよく)生き(ようとす)る力」や「(前向きに)生きる力(や構え)」のことであるということについては、これまでの文部科学省のさまざまなコメントを通して、先生方もご承知の通りです。

それは、「志」や「士気(モラール)」をもって充実した人生を生きることのできる力や資質というように言い換えることもできるだろうと私は考えています。

子どもたちが「志」をもって毎日の生活を送れるように支援する、というとは何やら大袈裟な感じがしますが、「自分で良いと思うこと、価値や意味があると思うことの実現に向かって、進んで働きかけたり行動を起こしたりすること」ができるよう、あるいはそういったことをめざせるように支援することが私たちの大切な務めとなるでしょう。

そのような子どもに育つために何が必要かと言えば、「感性を磨くこと」そして「情操を高めること」だと言うのは、広島大学の片岡教授。

「感性」や「情操」というと、音楽科や美術科の専売特許のように受け取られがちですが、「感性」は「よさに気づく感覚」のことであり、「情操」は「よさに向かおうとする心情」のことであると説明されると、これらの感覚や心情は何も芸術に限らず、人間が生きていくあらゆる場面にかかわる価値観やそれに伴う心の動きであることだと納得させられます。

そのような「感性」の育成や「情操」の高まりを支えるのは、何と云っても「豊かな想像力=イマジネーション」だと言われています。

子どもたちに同じ大きさの直方体の積み木をいくつか与えると、横に並べてベッドにしてみたり、積み重ねて椅子にしてみたり、それらを横につなげてソファにしてみたりして、単なる木片をいろいろなものに見立てて遊びます。それも「見立てて」いるだけではなく、椅子やソファそのもので「あるかのように」とらえて想像の世界に浸って遊んでいるようでもあります。現実には「そうでないもの」を「そうであるかのように」とらえてその世界に浸ることは、想像を逞しく働かせていることに他なりません、子どもの遊

びに供されるものがリアルになればなるほど、想像を働かせる必要がなくなり、その分想像力が乏しくなってしまうことは致し方のないところでしょう。

物語を読んで情景を思い描くことに比べると、アニメーションや映像で提示されると「わかりやすさ」は飛躍的に向上するに違いありませんが、想像力を働かせる余地はぐんと減少してしまいます。

表されたものごとが抽象的であればるほど想像力を働かさなくては理解することが困難であり、具体的になればなるほど理解できていなくても「わかった」かのような気分になれてしまう度合いは増大するからです。

「わかる」ということは「思い描き、イメージすることと深くかかわっている」と言ったのは佐伯胖東大教授ですが、本当にわかるためには他からの力ではなく自らの力で頭の中に思い描き想像し具体的に姿をとらえることが不可欠なのです。

次の文章は、藤澤周平の時代小説に描かれた文章です。

『南本所松井町の一丁目と二丁目をつないで、橋が二つかかっている。山城橋と真名板橋である。その店は、一丁目の通りを東に行って、山城橋にぶつかったところで、六間堀の河岸に沿って南に曲がったところにあった。』

これを読んで、町のたたずまいや位置関係を生き生きと思い描くことができれば、物語のおもしろさを存分に味わうことができるはずですが、そうでないと主人公の置かれた立場や位置がとらえきれず、物語に浸りきることは難しくなります。

文化に触れ、参加するためにも「想像力」はどうしても必要なのです。

身近に起きることから何事かを洞察するにしても、見過ごしてしまいがちなよさに気づくにしても豊かに想像して見えないものを「つなぐ」「形づくる」力が必要なのです。

音楽の分野では、管弦楽曲とピアノ曲を楽しむ味わうことのできる力は別物で、ピアノ曲を味わうことのできる人の方が音楽性が高いと言われていています。管弦楽は、一つの和音を長く伸ばして演奏することが可能で、それだけでも聴衆に「音楽」として聴かせることが可能ですが、ピアノは一つの和音を演奏してもすぐに音が減衰して消えてしまい、長く伸ばして演奏することができません。ですからピアノ曲を聴く人は、減衰してしまう音と音の間にある空間を想像力を働かせて「つなぎ」「埋め」ることによって音楽を感じ、味わっているようなのです。

想像力は働かせなければ伸びていかないことは他のさまざまな能力と同様ですが、そのためには容易にわかってしまうような、あるいはわかったかのような気分になってしまうような環境はふさわしくないと言えそうです。

そうした想像力に支えられた「感性（よさに気づく感覚）」をベースにした「情操（よさに向かおうとする心情）」が、「志」あるいは「士気」を形づくったり確かなものにしたたりするものであることを考えると、これからの学校でまず培っていきたいのは「豊かに思い描くことのできる力」なのではないかと思われてならないのです。夢に生きることのできる子どもだからこそ一層よけいにそう思うのですが、いかがでしょうか。

